食の「生きた情報」を多様な視点で提供

農文協発行の雑誌より

「文化」の視点から食の営みを読み解く

『vesta』　季刊　定価750円　年間3000円

食文化誌『vesta（ヴェスタ）』は、様々な専門分野から「食」の世界にアプローチし、食生活の基底にある深遠な世界に迫ろうとするユニークな専門誌である。名前の由来はギリシャ神話に出てくる12神の中の「ヘスティア」。ローマ神話では「ヴェスタ」の名前で登場する。「竈（かまど）の女神」と言われ、神話の中では控え目な存在だが、古代ギリシャ以前の母権制社会では世界の中心を表していた。

食育活動を支える「理論的な力」に

福岡県桂川町で長年食生活改善活動を行っている大野節子さんは、最近この『vesta』に出会った。同町には国の特別史跡第1号「王塚古墳」（6世紀前方後円墳）があり、この歴史資源を活かして毎年10月末に「古代の謎フェスティバル」が開催される。このイベントの中で、毎年大野さんたちは縄文・弥生時代の食事を再現、「古代健康食」と銘打って参加者に食べてもらう。また、日頃は子どもたちへの食の伝承にも力を入れており、稲のきた道や日本の行事の謂われ、郷土料理などを紙芝居にして伝えながら、実際に郷土料理を作ってもらう活動も行う。しかし大野さんはこうした活動を続けながらも、自分たちの進める米・魚・野菜・豆・海藻を活かした「一汁三菜」の献立が若い世帯には「おばあちゃん料理」として違和感さえ持たれていることを気にしていた。だから初めて本誌を目にした時に、自分たちの活動に自信を与えてくれる大きな「理論的力」を得た気がしたと言う。その時（45号）の特集は「香りと匂い」と「食生活指針」の2本立て。「香りと匂い」というテーマも、ハーブや香辛料を使った料理にも取り組んでいる大野さんにはとても参考になる内容だったし、外国の食文化に関する記事なども大変興味深く感じられ、「新しい食文化誌として今後も是非購読したい」とすぐに定期購読を申込んだ。

食のプロからも本誌初購読の感想が寄せられている。「食について自然科学からだけでなく、多方面の専門家の考え方などがうかがえて、とても面白いです」（赤堀栄養専門学校助教授）。「読みごむ内容の濃い本だと思います。ぜひ授業内容の参考にさせていただきたいと思っています」（愛媛調理製菓専門学校副校長）。

最新号の特集は「食の安全・安心」

最新号（48号）のテーマは「食の安全・安心」。最近は毎日のようにマスコミを賑わす話題であるが、これを食文化の視点から扱うとどうなるのか。この号の責任編集に当たった順天堂大学の丸井英二教授（公衆衛生）は巻頭で次のように述べている。「今回は最近の話題を直接に取り上げるよりは、むしろ食の不安を生み出している、見えにくい構造について、食文化という視野の中で、多少とも冷静に問題を解きほぐしてみたい。（中略）それにしても、『食』のみならず、私たちの生活全体がいかに哲学を、また原理原則を失っているか、改めて感じさせる特集である」。読み手の好奇心をくすぐる内容に仕上がっているようだ。

『vesta』リニューアル5周年を記念して11月末まで見本誌進呈。請求は農文協へ。

カラーグラビアも毎号充実。（タイ・バンコク旧市街の客家の店、具が評判の「クイティアオ（麺）」）

自治体、農協の「地産地消」活動をレポート

『21世紀の日本を考える』　季刊　定価400円　年間1600円

いま「地産地消」の動きが、全国に広がっている。そうした動きを支援し広めている自治体や農協などの側から情報を提供している『21世紀の日本を考える』（季刊誌）だ。例えば、「地産地消」を特集した15号（2001年11月号）では、「『暮らしの豊かさとは何か』が改めて問われている今、『旬の時期に旬のものを、地元の新鮮なものを味わう』ことが、最も豊かで健康な暮らしだと再認識されてきています」と述べ、「一八年前から地場産給食を実施」している愛媛県今治市の事例、岩手県花巻地方振興局の「オール地場産品学校給食の日」の取り組みも紹介。さらに地産地消を歓迎している消費者の声も紹介しているが、これは生産者側の「少量多品目生産」と結びついており、高齢農業者の「いきがい」の源になっている。「高齢農業者支援」も特集している『21世紀の日本を考える』は、村づくり・町づくりを進める人たちにとっての基本文献といえる。

「食の安全・安心」を暮らしから問い直す

入場無料

「地域が輝く いきいき食生活フェア2002」開催

誰が食の安全・安心を保障してくれるの？という問いかけに、「ライフスタイルを見直してみませんか」と提案する展示会が、農文協を事務局にして開催されます。

統一テーマは、「創ろう！食べよう！心と身体においしい生活」。

会場では、「安全・安心食情報コーナー」や高齢者・障害者向け食情報・グッズの紹介など、すぐ役立つ展示・相談ブースはもちろんのこと、ライフスタイルの提案が、様々に展開されます。

会場中央では、「健康日本！みそ汁カフェ」がお勧め。「ふるさとの味」具沢山のみそ汁を味わいながら、そのみそ汁が血液の流れをスムーズにする機能を確かめます。

「年末年始　日本の食文化」や「地産地消のおすそわけ」では、地域の風土を生かし、家族のため工夫を重ねた料理・食品が出展され、その味と「食べ物の物語」が堪能できます。

「食農教育体験コーナー」では、クリスマス・年末年始に向けた野山の素材を使った「クラフト教室」。また、ゾウ・シマウマ・コアラ・ライオン・ヒトのウンチから、それぞれの食べ物を学ぶ「ウンチ教室」を開校します。

基本は「食」を楽しむこと。食の世界を知り、味わい、様々な世界・人との結びつきを慈しむライフスタイルを提案する展示会です。

■開催日　2002年12月14・15日／場所　東京国際フォーラム（東京都有楽町）／主催　地域に根ざした食生活推進委員会／事務局（社）農文協／入場無料

※展示会の詳細はHPで。http://www.ruralnet.or.jp/shokn2002/

各地の食と農の後援会・学習会に「食と農の応援団」の活用すすむ

「食と農の応援団」事務局

「食と農の応援団」事業は農水省の助成による事業で、「食は生命」の認識を土台に食卓と生産現場の距離をちぢめ、望ましい食生活を実現してゆくために、生産者と消費者との交流会や、研修会、講演会、シンポジウム等に講師を紹介する事業です。

昨年度から農文協に事務局が移行した「食と農の応援団」ですが、全国各地の心ある食や農のアドバイザー・講師陣に結集していただき、応援団員は一気に二六三名に倍増しました。その結果、人間の生活の基本的な領域である医・食・農・想にまでジャンルが広がり、そしてまた地方の有志が格段に増えることによって、地方での研修会や講演会が開催しやすくなりました。

また、名簿を、従来の紙媒体の名簿の配布だけでなく、インターネットのホームページに掲載した結果、多様なグループ・団体から相談が寄せられるようになりました。

「食と農の応援団」は、ローカリズムにもとづく新しい価値観とライフスタイルの形成、そして地域から活用いただく所存ですので、何卒よろしくお願い申しあげます。

食と農の応援団の新設サイトは、http://www.ruralnet.or.jp/ouen/。紙媒体の名簿をご希望の団体や個人は、農文協文化部まで（〒107―8668港区赤坂7―6―1　FAX03―3585―6466）。

農と農の応援団」事業は農業者の"生涯現役"を支援する農業を基本とした"農工商連携"の地域づくり自治体の支援ですすめる都市と農村の交流「地産地消」を推進する直接支払制度をどう活かすか

最近の特集より　16号　17号　15号　16号　14号

農村文化運動

★「農」の立場から、自然と人間の対立関係の克服と新しい地域社会形成の道を探る。農家や研究者の交流誌。編集・発行・農文協／季刊、A5判、400円、年間1600円

最近の特集より　162号　163号　164号　165号　166号

「JA・IT研究会」第一回・第三回研究会の記録

農業教育で農都両棲の地域づくり

21世紀の教育を地域から問う

「JA・IT研究会」第一回研究会の記録

「総合的な学習の時間」の理論と思想

農文協　食・農・教育・地域づくり

増刊　現代農業

★自然から人間へ、農村から都市への呼びかけ―農的暮らしによるライフスタイル革命を全国から伝える。編集・発行・農文協／季刊、A5判、900円、年間3600円

既刊より

定年帰農パート1&2／青年帰農／地域から変わる日本―地元学とは何か／朝市大発見／日本的グリーンツーリズムのすすめ／地域で介護をすめ／食べものクライシス／新ガーデンライフのすすめ／ナチュラルライフ提案カタログ

【最新刊】スローフードな日本！

月刊　現代農業

★田舎暮らしの総合実用誌。有機栽培・産直・直売、食品加工、民間療法、食農教育など農村からの発信。編集・発行・農文協／月刊、A5判、800円、年間9600円

【11月号】特集・「秋の野山」が売れる

21世紀の日本を考える

〈食料・農業・農村〉

★「農村空間」から人生80歳時代の新たなライフスタイルを提言するオピニオン誌。行動呼びかけ人・内山節、川勝平太氏ら／季刊、A5判、400円、年間1600円